

# 福竜丸だより 400号記念(別冊)

## 第五福竜丸を応援してくださるみなさんからのメッセージ

福竜丸だよりは、一九七八年の創刊から通算四〇〇号を迎えました。二〇一六年は展示館開館四〇年、二〇一七年は船の建造七〇年と節目が続くなか、日ごろ展示館と協会を支えてくださる方がたからメッセージが寄せられています。ここに特集で紹介いたします。

\* \* \*

**杉 重彦** (協会顧問・建築家)

第五福竜丸七〇年古稀を迎えるのは、多くの方々のおかげで、意思、弛まぬ努力に依るもので、想いを新たにいたしております。今後技術上、運営上からも幾多の困難があると思われませんが、八八年は米寿、一〇〇年は百寿、さらに二二〇年は万寿、二〇〇年は天寿となります。

**山村茂雄** (協会顧問・編集者)  
**六万人をこえた来館者**

**開館二〇カ月で軽く突破**

「福竜丸だより」創刊号(第一号)が掲げている見出しです。創刊号の日付は一九七八年四月一五日。文中、六万人を突破した三月五日は「天気の良い日曜日とあって五〇五名が来館、通算来館者数六〇二六二名となり一九七六年六月一〇日オープンして以来二〇カ月で六万人を超えたこと

になります」と記しています。

「ある人たちは、毎日平均二〇名出席の平和学習会、あるいは原水爆禁止の学習会を開いているのと同じであると聞いています。その可否は別にして展示館が青少年を中心に平和・原水爆禁止の思想の涵養に役立つとよいうという目的を見事に達成していると言うことができますよ」

文章を書かれたのは専務理事 事広田重道さんであることは歴然です。広田さんの矜持(きんぎょ)をみる思いがします。

「創刊のご挨拶」は平和協会会長三宅泰雄さんが書かれています。三宅さんはそのなかで、平和協会の前身、第五福竜丸保存委員会は昨年解散するまで三四号にわたる「福竜丸ニュース」を発行した功績にふれています。この「福竜丸ニュース」はB判タイプ印刷でした。

「福竜丸ニュース」から「福竜丸だより」まで、運動組織の保存委員会から平和協会の活動へ、その都度、各種宣伝物の制作にかかわらせていただいたことを思います。

年を重ねることは、活動各分野の先達との別れを体験することでもあります。広田さんが亡くなってから三五年ですが、第五福竜丸展示館の来館者は、開館から四一年の六月、五三〇万人を超えました。

**岩垂 弘**

(協会顧問・ジャーナリスト)

**福竜丸保存に**

**献身した人々に敬意**

核兵器による惨禍を語る時、人々の脳裏にまぎれなく浮かんでくるのは、広島である。長崎も同様な被害を受けながら、なんとなく影が薄い。これは、一つには長崎が「第二の被爆地」ということもあるが、広島には「被爆の象徴」ともいべき原爆ドームがあるのに対し、長崎には、それに匹敵する被爆建造物がないからだというのが私の見方だ。

広島では、原爆ドームにつ

いて保存か撤去かで市民間に論争があったが、保存論が勝った。長崎では、廃墟となった浦上天主堂を原爆遺跡として残そうという動きがあったものの、当時の市長の意向により撤去された。

第三の核被害ともいべきビキニ被災事件では、被災した第五福竜丸が奇跡的に消滅を免れ、都立展示館で水爆の恐ろしさを世界に訴え続けている。このため、人々の記憶から「ビキニ」が消え去ることとはないだろう。東京湾の藻屑となる運命だった福竜丸を引き上げ、その保存のために献身してきた人たちに敬意を表したい。

**青木佳子** (ボランティアの会)

顧問 保存運動の中心メンバー)

第五福竜丸は一九四七年和歌山県古座造船所で、カツオ船第七事代丸として誕生し、被災後は三重県伊勢市で改修されました。私が展示館のボランティアガイドをしていた一五年程前、ボランティアの会で伊勢の強力造船所(当時はずでに造船業を廃業)を訪

(2めんにつづく)

ねたことを思い出しました。第五福竜丸は恐ろしい死の灰を浴びたり、廃船そして保存運動と、さまざまな歴史を経てきました。いま夢の島の第五福竜丸展示館で多くの人たちの前にいることを喜んでいっていると思います。

## 成瀬 實

(焼津・平和のための戦争展)

六三年前、米国のマーシャル諸島ビキニ環礁での水爆実験に遭遇し、「死の灰」をあげた第五福竜丸の焼津。

アジア太平洋戦争下、海洋での平和な水産漁業の生存は奪われ、大きな犠牲・痛手の果てに敗戦を迎えた。戦前から漁業地焼津は、漁業従事者は招集で戦地へ、残された乗組員は漁船と共に農林・陸海軍省に「徴用」され、戦時体制の真つ只中へ。その数延べ一〇〇余隻。海の藻屑とされた数々の漁船、犠牲者も四〇〇名を超えた。

戦後の漁業復興は、焼津にとって並大抵ではない困難下、占領中の漁業水域の制限もようやく解けた五一年頃、漁港一期工事整備―外洋に乗

り出す造船業発達にこぎつけ、鯉漁中心から遠洋鮪漁への展望を切り拓くに至った。福竜丸の西川船主は、神奈川・三崎港で活躍した鯉漁船・第七事代丸の「改造」鮪漁船を購入し、豊漁に込めた「五・福竜」の縁起ネームを旗印に漁業復興に努めた。

夢の島に保存・展示された第五福竜丸は、「ビキニ被災事件を忘れない」生き証人の役目を担い続けている。焼津からの修学旅行訪問も広がってきていると聞く。

## 鎌倉悦男(プロデューサー・ディレクター・賛助会員)

第五福竜丸事件は私が中学生の頃に日本社会の大きな事件として知りました。

私が社会人となり映画やテレビ番組の企画製作をするようになって、今からおよそ二〇数年前に、広島・長崎について日本は三度も原水爆の被害にさらされた事実に関心を持って、第五福竜丸事件とは、何であったのかのテーマでドキュメンタリー番組を作るため、第五福竜丸乗組員、治療にあたった医師たちにイ

ンタビューし、企画の資料集めをしていた時に、第五福竜丸平和協会が協力してくださった。ラジオ・新聞で入院中の乗組員の様子を知り、お見舞い、励まし、早期完治を祈る手紙やハガキ約三〇〇〇通が所蔵されていることを教えられ、そのうち約二〇〇通を読みました。そのなかで強い印象に残ったのは、七、八歳の男の子が「久保山さん早く治って私の家に遊びに来てください」と、代田橋駅から自宅までの略図を書いた一通の手紙でした。書いている懸命な姿が目につかぶよう胸を打たれました。

実際の社会のなかでの出来事について実態を調査し、それを統計にしてあらわしてゆく、という学問について関心を持ち、生涯を通じて自分の仕事にしました。学問研究は人間の社会の現実を知ることからはじまり、それを統計にあらわし、社会の現実を、人間にとってより豊かなものに変えてゆく、ということが彼の理想とした学問だったのだと思います。

## 平和を語る

### 第五福竜丸の集い事務局

「集い」事務局を引き受けているのは「子どもと民話」という小さな会です。会員の堀田さんのご主人が、夢の島に捨てられていた第五福竜丸を見つけ、「原水爆の生き証人をこのままにしておいていいのか!」と全国に発信した方々の一人だったのです。その意思を継いで会が始まりました。

一九九二年、第一回目が開かれました。九三年には呼びかけに応じてくださる方も増え、午前・午後に分かれて行うほどになりました。今年は二五回(二七年目)となります。三度目の核の犠牲となつた「生き証人」である第五福竜丸の保存と、「再び戦争をしてはならない」ことを語り伝えることを基本に、思いを寄せて下さる方々のご協力でここまでやって参りました。核兵器廃絶の火蓋を切つた第五福竜丸からの運動。一人ひとりの小さな声が、今では世界中で渦を巻くように広

がっています。これに心えられない日本の政府に地団駄踏んでいますが、負けてはなりません。一歩一歩、一声一声を重ねて、日本中を揺り動かせたらと思っています。

## 小池智則(共同通信記者)

### 埋もれた事実を

第五福竜丸展示館との出会いは二〇〇〇年ごろ、本社会部で仕事を始めた時だった。ほぼ知識ゼロからのスタート。その時は思いもしなかったが、自分にとって一生の取材テーマになった。国際政治から一人ひとりのヒューマンストーリー、さらには文学や音楽まで、幅広い分野に目を開かせてくれた。

展示館は広島・長崎の原爆資料館のように大きくはないが、学芸員の皆さん、役員やボランティアの方々の存在感が圧倒的だ。光が当たらない問題や、埋もれたままの事実の本質をつかむという基本姿勢を教えられた。広島や原発事故後の福島でも勤務して「もっと勉強しなければ」との思いを強くしている。

展示館には、引き寄せられ

るように新しい記者がやってくる。メディア各社の報道が続いているのも、最初は何も知らない記者を温かく受け入れて、教えていただいたおかげです。これからもよろしくお願いします。

## 島田興生

(フォトジャーナリスト・ビキニふくしまプロジェクト)

### 「四〇〇号」までの

#### 長い航跡と続く航海

手元にある「福竜丸だより」のファイルをめくった。保存は一九八八年八月発行の二二四号からで、途中抜けている所もあり、全部で二二四冊。

「たより」の第一号の発行は一九七八年四月なので、発行から約一〇年間、私は展示館の活動と無縁だった。そこで、協会が発行した「三〇年のあゆみ」を読んだ。そこには、三宅泰雄、広田重道氏など大勢の先達が第五福竜丸の保存、展示館運営のために払った努力や奮闘が記録されていた。また九〇年代に事務局を支えた三尾喬英さんと秦小夜子のご苦労も忘れられない。秦さんは展示館事務局員

として初めて八八年八月にマニラを訪ねた。

「たより」には、第五福竜丸の歴史的意義や展望を取り上げるばかりでなく、著名な学者やジャーナリスト、運動家がビキニ事件以外のさまざまな社会事象を論じて、一般的な博物館の広報誌とは一線を画したユニークな内容となっている。可能ならばどこかの節目で「縮刷版」が刊行されることを願っている。

## 奥山修平

(協合理事・中央大学教授)

私が第五福竜丸と最初に出会ったのは、学生時代のことです。何か企画や集会があったからではなく、一人で出かけたと記憶しています。地下鉄東西線が東陽町から西船橋まで延伸されて間もない頃です。不便な交通手段を乗り継いで辿り着くと、そこには荒涼たる風景が広がり強い衝撃を受けました。

## 道祖尾朋子

(展示館ボランティア)

展示館でボランティアをするようになって間もなく一年。教員を退職し、子どもたちの前で話す機会は減りましたが、修学旅行や社会見学で訪れる生徒にガイドをすることで、教育現場での感動や思いがよみがえります。事前学習を重ね、合唱の練習をし、千羽鶴を折ってくる生徒たちの姿に、励まされる思いです。ほかの施設でのボランティアでは味わえないのではないのでしょうか。

二か月に一度発行される福竜丸だよりの発送は、私たち

発足時からの理事。

ボランティアメンバーが交代で手伝います。その他にも月に数回の担当が回ってくる。他のメンバーが書いた日誌で、企画展のチラシを折ったり、グッズの整備をしたりと、さまざまな角度から第五福竜丸と協会をサポートしていることを知ります。第五福竜丸の核のない未来への航海の一員だと実感しています。

## 山本義彦

(協合理事・中央大学教授)

私が第五福竜丸と最初に出会ったのは、学生時代のことです。何か企画や集会があったからではなく、一人で出かけたと記憶しています。地下鉄東西線が東陽町から西船橋まで延伸されて間もない頃です。不便な交通手段を乗り継いで辿り着くと、そこには荒涼たる風景が広がり強い衝撃を受けました。

次の出会いは、赤子の頃の長女と出かけた時ですから、一五年ほど時が流れたことになり。立派な展示館が完成し見違えるほどの第五福竜丸でしたが、底冷えに親子ともども震えた覚えがありま

す。まだ新木場駅はなく不便でしたが、夢の島の広い駐車場は無料で、私もよく子どもたちと出かけるようになりました。ほどなく京葉線や有楽町線が開通し熱帯植物園も出来たことから、多くの人が夢の島を訪れ、第五福竜丸と出会う機会が増したの嬉しいことです。

これも多くの先輩方による倦まず弛まずの努力の賜物だと思います。これを継承・発展し、人々をつなぐ重要な媒体がこの会報であると思えます。益々の内容充実を期待しております。

## 山本義彦(協会代表理事・静岡大学名誉教授)

「福竜丸だより」創刊四〇〇号の発行を心より喜んでおられます。このたよりをしっかりと読むようになったのは、二〇〇〇年代に入ってからです。常に新しい福竜丸とその周辺の情報を集め、長く支えてこられた人びとの回想を含め、貴重な情報発信のプラットフォームとして機能してきたと思えます。そればかりか

戦後と今日の日本に求められてきた課題としての核被災の問題、しかも日本を始め国際的な核問題の解決をきちんと位置づける必要性を認識させます。

さて今後のたよりへの期待を述べてみましょう。第一は、貴重なこのたよりを人びとの共有財産とし、かつこの長期の日本の核をめぐる課題を一層理解するうえで、展示館のウェブサイトに掲載してはいかがでしょうか。容易に貴重な情報に接する機会を市民に提供できます。

第二に、歴代関係者の証言記録を残すことも必要です。事業の意義を継承することは私たちの責務です。

第三には、ご協力いただいている専門家の方々の随筆等を集め、一層の理解を深めたいです。

第四に、日々お力を頂いているボランティアガイドの皆さんのご意見を取り上げ、展示館の改善の提案を得たいものです。福竜丸からの発信もさらに強化しましょう。

(1)

福竜丸だより(第1号)

1978年4月15日

**福竜丸だより**

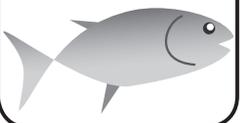
都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494

福竜丸だよりを  
読んでください!

「福竜丸だより」は隔月発行のニュースです。賛助会員(年間五千円) ニュース会員(年間二千円)で購読することができます。第五福竜丸の航海を支えてください。ぜひ周りの方にもお勧めください。



**創刊のご挨拶**

平和協会会長  
三宅 泰雄

第五福竜丸保存委員会は、昨年三月末に解散するまで三十四号にわたる第五福竜丸ニュースを発行し、福竜丸にかんする情報を関係各位に伝えて参りました。その功績がきわめて大きかったことが、いま、改めて

痛感されます。私どもの平和協会は、今年はいっそうの前進をめざす活動方針をとることにしましたので、その方針に沿うためにも、かつての福竜丸ニュースの伝承を守り、装いも新たに、この福竜丸だよりを毎月発行することになりました。今後、関係各位のご支援によって、内容のいっそうの充実をはかりたいと思っております。

**六万人をこえた来館者  
開館二〇カ月で軽く突破**



第五福竜丸展示館への来館者数が、三月五日で六万人を突破しました。

この日、天気の良い日曜日とあって五〇五名が来館、通算来館者数六〇二六二名となり、一九七六年六月十日に展示館がオープンして以来二〇ヶ月で六万人を越えたこととなります。来館者数の動向をみると、二〇

ヶ月に六万人ということは、毎月平均三千名となり、毎日の平均では二二〇名ということになります。これは毎日、二二〇名平均の方が福竜丸を見学され、原水爆の問題について考えていただけるということで、ある人たちは、毎日平均二二〇名出席の平和学習会、あるいは原水爆禁止の学習会をひらいているの

と、全く同じであると言っています。その当否は別にして展示館が青少年を中心に平和・原水爆禁止の思想の涵養に役立つようという目的を美事に達成していると言いうことができましよう。

